

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 19 日現在

機関番号：15301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520673

研究課題名(和文) EFLライティングにおける記述フィードバックの研究

研究課題名(英文) A Study of Written Feedback to Students' Writing in the EFL Classroom

研究代表者

大年 順子 (Otohi, Junko)

岡山大学・その他部局等・准教授

研究者番号：10411266

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円、(間接経費) 570,000円

研究成果の概要(和文)：本研究はEFLでの環境を念頭において、大学でのライティング授業のためのフィードバックのあり方を研究してきた。アカデミックライティングに対するフィードバックには「内容・構成」面と「語彙・文法」の両面が必要であり、学生も教員フィードバックを期待しており、特に「語彙」へのフィードバックを必要としている学生が多いことが分かった。現場教員のフィードバックを質的手法で分析した成果を国際学会および国際誌において発表を行った。またオンラインラインのライティング練習ツールを使用する際の教員の指導やフィードバックのあり方も別の国際学会で発表し論文にまとめ、現在論文の審査を受けている。

研究成果の概要(英文)：The study focused on written feedback to students' English texts in an EFL context. We found that both feedback on content and grammar are equally important to EFL students. Our research also revealed that students particularly expected feedback on vocabulary use. EFL teachers' feedback comments were analyzed quantitatively and the results were presented at an international conference, and the results were also published in a refereed journal. Further, a comparison between automated writing evaluation and human evaluation was conducted, with some teaching implications suggested when using an online writing practice tool outside of the classroom. The outcome of the study was presented at another international conference and the paper of the study is currently being reviewed.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：外国語教育

キーワード：英語教育学 ライティング フィードバック

## 1. 研究開始当初の背景

フィードバックの研究は、学習者のライティング力発達に影響を及ぼす観点から、その有効性と疑問点が両方指摘されてきた。まず、有効性については、プロセス・ライティングのアプローチから教員のフィードバックは最終原稿の質的向上に欠くことができないという考え方がある。また、第二言語習得論から、教員が文法などの間違いを指摘することにより、学習者の言語修得発達促進が期待される。さらに社会言語学の見地からは、教員が「読者」として学習者のライティングに接することで、学習者が自分のライティングを第三者の視点を踏まえて客観的なライティングを構築することができると言われていた。このようなフィードバックの可能性をEFLで有効に活用するために体系的な検証と考察が必要とされていた。

## 2. 研究の目的

英語ライティングにおいて、教員が学生の草稿へ記述コメントをつける、“フィードバック”と呼ばれる指導法は、学習者の最終原稿の質的向上のために大変重要な役割を果たすと考えられている。英語学習者にとって、

ライティング練習は最も孤立した学習になりがちであるが、教員が学習過程にフィードバックという形で介入することで相互のコミュニケーションが生まれ、学習者は言語能力の発達だけでなく、社会的な関わりの中で自発的な発信能力を育成することも期待される。本研究は、教員による学習者のライティングに対する記述フィードバックが、学習者のライティング力にどのような影響を及ぼすかを検証したものである。

## 3. 研究の方法

I：日本の大学におけるライティング授業の中で、日本人および英語ネイティブ教員の学生のライティングへの記述フィードバックを収集した。収集した教員フィードバックデータを下記の言語学の見地により分類した。

(1) 内容・展開

(2) 構成

(3) 文法

(4) 語彙

(5) 綴り・句読点など

その後、(2)の構成に焦点をあててアカデミックライティングの重要な評価観点である「結束性」(cohesion)について質的研

究のアプローチであるグランディッドセオリーアプローチを用いて分類していった。さらに、より分析の信頼性を高めるために、実際に記述フィードバックを行った日本人・英語ネイティブ教員からフォーカスグループとして、日本人教員2名、英語ネイティブ教員3名の記述フィードバックに対するインタビューを行った。

II：オンラインライティング学習ツールであるCriterionを教室外の自主学習として使用し下記のように2つをグループ（各6名ずつ）をつくり、クラスルームリサーチを行った。

- (1) 教員からのフィードバックあり
- (2) 教員からのフィードバックなし

まず、Criterionのライティング評価と教員とのライティング評価の相関分析を行った。

さらに、教員側がレトリック面を評価するために分析的評価ルーブリックを用いて、Criterionの総合評価と比較した。これは、授業外でオンラインライティング学習を活用するために、具体的なフィードバックポイントを検証するためであった。

#### 4. 研究成果

3年間の研究の中で、国際誌に論文を1本、国際学会において2回の口頭発表を行った。自主学習としてオンラインライティング練習ツールを取り入れた際の教員フィードバックを論じた論文を国際誌に送付しており現在審査を受けている。なお、当該論文はすでに国際学会で発表されている。

3年間の研究からEFLの学習環境での行われる記述フィードバックは主に下記の2点が提言できる。

(1) 学習者に教員のフィードバックを理解させて、自らのセルフフィードバックにつなげさせるためにも、教員から受けたフィードバックをどのように受け取ったかを学習者に記録させていくことが必要である。

学習者の「気づき」を促すことで、より主体的にフィードバックを受け止めることができ、さらに教員が学習者の記録を確認することで、自らのフィードバックをより学生にとって有効なものにするための参考資料ともなる。

(2) 学習者のライティング練習は授業外でも奨励されなくてはならない。オンラインラ

イテイング学習ツールなどを使用することは効率的であるが、教員のフィードバックもおもに「レトリック面」に焦点をあてて行うべきであり、それが学習者の「読者の目」を育成することにつながる。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2 件)

Written feedback in Japanese EFL classrooms: A focus on content and organization Neil Heffernan, Junko Otoshi and Yoshitaka Kaneko, 2014 年 1 月, The Journal of Language Teaching and Learning 4(1), 55-68. 査読有

Use of ETS Criterion to Prepare for the TOEFL iBT Independent Writing Task, Junko Otoshi, 2013 年 3 月, The Bulletin of the Writing Research Group, JACET Kansai Chapter 10, 13-24. 査読有

〔学会発表〕(計 2 件)

Using Criterion as a self-study writing tool, Junko Otoshi, Neil Heffernan and

Yoshitaka Kaneko, 2013年7月5日～2013年7月6日, The Korea Association of Teachers of English 2013 International Conference, Hankuk University of Foreign Studies, 国外(韓国ソウル市)

Teacher's feedback on students' writing: cohesion or confusion, Junko Otoshi, Neil Heffernan, and Yoshitaka Kaneko, 2012年8月9日～2012年8月11日, 7th Intercultural Rhetoric and Discourse Conference, Indiana University -Purdue University Indianapolis, 国外(アメリカ合衆国・インディアナポリス)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

大年 順子( OTOSHI JUNKO )

岡山大学・言語教育センター・准教授

研究者番号: 10411266

(2)研究分担者

金子 義隆 (KANEKO YOSHITAKA)

宇都宮大学・基盤教育センター・准教授

研究者番号： 70389774

ヘファナン ニール (HEFFERNAN NEIL)

愛媛大学・英語教育センター・准教授

研究者番号： 40524690